

大学における民俗芸能の継承と発展 —岩手県岩泉町の中里七ツ舞に関する教育実践—

島崎篤子*

(2006年2月6日受理)

Atsuko SHIMAZAKI

The Passing Down and Development of Folkloric Performing Arts in University
~Practical Education about *Nakasatonanatumai* in Iwaizumi Village, Iwate Prefecture~

はじめに

岩手県の北沿岸地域や県北地域で伝承している民俗芸能「七つ物」は、五穀豊穡を祈って七つの踊りを舞う芸能である。その多くが廻り神楽の黒森神楽を源流としており、神楽宿への舞い込む時の演目「シットギジシ」を基に創作されたといわれている¹⁾。研究対象の中里七ツ舞は、岩泉町に伝わるこの「七つ物」の一種である。岩泉町では、昭和50年代より「七ツ舞」の名称を使うようになったというが²⁾、この地区には有名な中野七頭舞があり、呼称は一樣ではない。

近年、地域の教育力の低下や総合的な学習の導入によって、学校が地域の民俗芸能の伝承に関与するケースが増えている。しかし少子化による統合や廃校によって、学校で伝承していた芸能が中断したり、一つの学校で複数の地区の芸能を伝承せざるを得ない現実も見られる。

海の幸に恵まれた陸中海岸国立公園に面した小本地区にある小本小学校では、昭和54年2月の第1回七頭舞発表会で中野七頭舞が発表されて以来、本年度で28回目を迎える。この間、1996年には中島分校、2003年には中里分校が統合されたため、毎年2月に行われる七頭舞発表会では、中野七頭

舞の他に、中島七ツ舞、中里七ツ舞そして大牛内分校の大牛内七ツ舞も加わって4種の舞が披露される。現在、中里七ツ舞は、中里地区の保存会と小本小学校で伝承されているのである。

本研究は、中里七ツ舞に関する基礎的な研究および大学で取り組んだ二つのタイプの学びに関する実践的研究である。第一に中里七ツ舞について述べ、第二に伝統継承型と素材発展型の学びに関する実践的研究について述べる。そして最後に、本実践を振り返ることにより、視点を広げて学校教育における民俗芸能の取り上げ方についても触れることにしたい。

1. 中里七ツ舞の由来と伝承

中里地区は小本川の下流の平坦地に古くから開けた集落の一つで、のどかな田園風景が広がる46戸の集落である。主な産業には農業の他に林業や酪農がある。農業では、稲作中心にダイコンやニンジンなどの野菜や椎茸栽培なども行っている。近年、若者が外に出て行くようになったため、地域住民の高齢化が進み、子どもも減少している。このため中里小学校は小本小学校に統合されたが、前述したように、中里七ツ舞は、現在、小本小学

*岩手大学教育学部

校に通う中里地区の子供によって伝承されている。

(1) 中里七ツ舞の由来と変遷

中里七ツ舞は、岩泉町で既に全国的に知られている中野七頭舞と同様、天保年間（1830～1843）から岩泉町中里地区に伝わる七ツ舞である。中里神楽の継承者で神楽太夫と呼ばれた踊り上手な武田新九郎が中里地区で創始した踊りである。新九郎はまた、大牛内地区に入植してから大牛内七ツ舞も創始している。したがって中里七ツ舞と大牛内七ツ舞は、振りは違うが、創始者が同じ兄弟舞である。中里地区では、この中里七ツ舞が誕生した頃、飢饉のために村人は困窮していた。しかし中里七ツ舞を踊り始めてから5年間豊作が続き、村人はこれを中里七ツ舞の御利益と考えて100年以上踊り続けたといわれている。

その後の変遷は定かではないが、30年位前には、まだ中里青年会でこの舞いを踊っていた。この頃25歳だった現保存会会長の武田由起子は、お祭りのアトラクションで中里七ツ舞を初めて見て、涙が出るほどの感動を覚えたという。青年会による七ツ舞が途絶えた後、しばらくして中里小学校の千田次郎校長の熱意で中里小学校で中里七ツ舞が復活した。この時、太鼓は竹花実（猿沢地区）と武田久志の二人が中心に指導し、踊りは加藤格造が指導した。父親が中里七ツ舞の指導者だった格造は、若い頃、中里七ツ舞の踊り上手が舞う先打ちを踊っていた。しかし中里小学校での復活は千田校長在任期間の3年間のみで、その後、少なくとも十数年のブランクが続いたが、1988年に武田由起子の手によって再復活された。

武田が再復活に取り組み始めた頃、中野七頭舞の元保存会会長の山本恒喜と竹花実に学んだ当時小学生だった工藤雄宇（現在27歳）が中里七ツ舞の太鼓をたたいていた。もともと中野七頭舞の太鼓打ちだった工藤の太鼓は竹花実とは違ってテンポが早く、この影響を受けた中里七ツ舞は、現在のような早いテンポの舞に様変わりした。

武田は、すり切れるほどビデオを見て踊りの振りを起こし、ほぼ形が整ってから、青年会で踊り

を教えていた加藤格造と太鼓奏者の竹花実に振りの確認をしてもらい、中里七ツ舞の伝承者としての許可を得ることが出来た。これによって中里七ツ舞は再復活を果たし、今年で17年目を迎えているのである³⁾。

(2) 中里七ツ舞の保存会と小本小学校での練習

中里七ツ舞の保存会は、会長の武田由起子（現在51歳）を中心に、名簿には小・中・高等学校の生徒とその保護者で総勢62人位の名前が記されている⁴⁾。名簿によると大きな組織のようだが、現在、中里地区から離れている者や名前だけの協力者会員も含まれており、実際に積極的に踊っているのは小学生である。しかしこの実働部隊の小学生は、年々減少している。既に中里地区だけでは人数不足になっており、保存会には近隣の宮本地区と日向地区の子どもが加わり、何とか中里七ツ舞に必要な人数を確保している。現在、青年部は存在していないため、民俗芸能祭などの公演依頼がある時には、中学生以上の都合のつく若者たちが小学生と一緒に参加している。

保存会の練習は、通常、夜の7時から8時、または7時半から8時半の約1時間を週複数回行っているが、公演のある時には、毎晩、集中練習を行っている。夏休みには、週6日間練習日を設定しており、プールの帰りに子どもたちは自由練習に参加している。中里七ツ舞保存会の子どもたちは、岩泉の芸能祭（8月）、氏神の八幡様の祭り（9月）、小本小学校の運動会（5月）や七頭舞発表会（2月）で踊るのを楽しみにしている。

中里地区の子供たちが通う小本小学校では、11月から2月の「七頭舞発表会」に向けて、分校で練習している大牛内七ツ舞以外の3地域3種類の舞が、次の時間枠で練習されている⁵⁾。

○月・水・金の昼休み 13:00～13:25

○各学年の「浜っ子タイム」（総合的な学習の時間）

○クラブ（水）15:00～15:50

練習計画は、学校側が行事等を勘案して各舞の練習枠を設定し、これを各地域の保存会に連絡し、

保存会の会長やメンバーは都合がつく時に学校での指導を引き受けている。

(3) 中里七ツ舞の構成と道具

中里七ツ舞には、その名前の通り7種類の踊りがある。「道具取り舞」「横ばね」「組ちらし」「ちらし」「鳥居がかり」「五方の矢」「道具納め」の7つである。しかし現在は、「五方の矢」は途絶えてしまい、6つの舞のみを伝承している。6つの舞は、踊りと踊りの間を「ちらし」で舞いつな

ぐため、全体的に一連のつながりをなし、ほとんど止まることなく流麗に舞われる。舞い始めたら最後まで舞い続けるという体力的に消耗する舞のため、子どもか若者でない限り踊り切るのは難しい。

中里七ツ舞は天照皇大御神が天から降りてくる際の道案内や行路障害をかたどったものと伝えられており⁶⁾、それぞれ6つの踊りには、次に示すような特徴がある。舞い手はこれを理解して自分の振りに反映させながら舞うことになる。

〈中里七ツ舞の構成〉 *入場、退場、各舞の間に「ちらし」が舞われる。

| | |
|--------------|--|
| 道具取り舞 | 最初に神社に奉納されている7つの道具をいただき、境内で踊る舞である。1回目は道具を持たずに踊り、2回目はそれぞれの道具を持って踊る。 |
| ちらし | 舞台に出る時や舞と舞の間に入れるもので、疲労回復や呼吸調整のための動作。実際には楽な動きではなく、次の踊りのための心の準備のためと考えられる。ちらし舞では7種の道具の特徴的な道具さばきが際立って見られる。 |
| 横跳ね | 全ての始まりと開拓のための人材を揃える意味をもっている。このため先打ちを先頭に仲間が揃ってから舞い始める。3回繰り返し、「ちらし」を挟んでまた3回繰り返す。 |
| 組ちらし | 他の七ツ舞では「戦い」となっている場合もある。田畑を開拓する際に妨げになる物や獣などとの戦いを意味する。この他、戦いの舞の中には、チームを乱すものや自分自身の怠け心に対する戦いも意味しているといわれている。 |
| 鳥居がかり & 全体三足 | 他の七ツ舞では「三足(みあし)」ともいう。神様に豊作の感謝を表すために神社の鳥居の前で踊る。ほぼ「道具取り舞」と同じだが、見ている者は、より派手な動きに魅せられる。先打ちがソロで踊った後、2人ずつ向かい合ってリズムカルに踊る。2人ずつの踊りに続けて全員同じ振りで舞う。これを「全体三足」と言っている。 |
| 道具納め舞 | 「道具取り舞」と同じ踊りである。七ツ舞を踊り終えてから、再び神社に道具を納める時に踊る。通常の公演では省略されることが多い。省略する場合、「全体三足」の後、「ちらし」でステージを去り、消える前に各人が丁寧にお辞儀をする。このお辞儀が非常に美しく、中里七ツ舞の神聖なイメージを高めている。 |

中里七ツ舞には7つの役割があり、本来は先打ちが一人、その他は二人組の総勢13名で舞う。

〈中里七ツ舞の道具と役割〉

| | |
|------|---|
| 先打ち | 神に捧げる御幣束のようなものを棒の先端につけた道具。先頭に立って、進む方向を判断し、行く方向を指し示しながら前に進む。 |
| 谷地払い | 先打ちよりも長い棒で両端に飾りが付いた道具。先打ちの指示に続いて、獣や悪霊などを払いのけ、みんなが歩きやすくする。 |
| 薙刀 | 柄の両端に飾りが付いた薙刀。藪を切り、獣を倒しながら力強く動く。 |
| 太刀 | 文字通り刀で、柄のところに飾りを付けたもの。みんなの田畑が荒らされないように太刀をもって見張りをする。 |
| 杵 | 餅つきの杵を踊り用に洗練した道具。餅をついて行路の無事をお祝いする。 |

| | |
|----------------------|--|
| 扇 子 ⁷⁾ | 他の七ツ舞では「小鳥」ともいう。右手に弓、左手に紫の扇をもつ。この扇の色は各七ツ舞で違う。鳥を弓で射り、ご馳走をつくって豊作の喜びを祝う。 |
| おかめ & ひよとこ | おかめは、右手に扇、左手にへら（篋）をもって舞う。頭の左側におかめの面をつける。しっかりとひよとこをリードする妻の役目。ひよとこは、右手に扇、左手に稲をもって舞う。頭の左側にひよとこの面をつける。みんなに笑いを振りまきながら慰め、心が一つになるように面白おかしく踊る。 |

(4) 中里七ツ舞のお囃子と舞

中里七ツ舞のお囃子は、何と言っても太鼓が中心であり、太鼓だけで踊ることができる。

鉦は太鼓と同じリズムを担当している。通常、踊りの振りとメロディーが密接な関係をもっているケースが多いが、中里七ツ舞の笛は飾りの意味しかもっていない。中里地区では、これまで笛奏者が育たず、公演のたびに黒森神楽保存会に依頼して即興演奏を担当してもらっている。通常の練習が太鼓だけで行われるため、舞い手は公演の時に初めて鳴り響く笛の即興演奏に惑わされずに、太鼓に全神経を集中して、ひたすら太鼓のリズムと合図を聴き取って舞うことになる。

このように太鼓が要の中里七ツ舞では、太鼓奏者は、常に踊りの様子を見ながら、踊り手の準備ができるまで「ちらし」のリズムを打ち続け、当意即妙に次の踊りに移行する。リーダー的な存在の先打ちが重要視されるのは、こうした一種の即興性を秘めた一連の舞の中で、太鼓のリズムの変化を確実に聴き取りながら先頭で踊り抜いていく強靱な精神力が必要とされるからである。

2. 岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」による中里七ツ舞の伝統継承

便宜上、筆者は、学校教育における民俗芸能の二つの学び方に伝統継承型および素材発展型と命名した。これを指導する側から言い換えると、二つの指導方法ともいえる。

伝統継承型は、保存会やその芸能の担い手や関係者の協力を得て、伝承されている芸能をできるだけ忠実に継承しようとするものである。通常、学校教育で地域の民俗芸能を取り上げる際には、

この伝統継承型で取り組むことが多い。限られた教育課程の中では、単なる体験学習程度で終わらざるを得ない場合が少なくないが、それでもある程度の教育的効果は得られる。しかし諸事情が許すならば学校内における伝承の可能性を追求することが取り上げた民俗芸能の将来にとっても望ましいに違いない。

筆者は岩手大学における中里七ツ舞に関する伝統継承型の教育実践として、体験重視の第1次実践と本格的な継承を目指した第2次実践を試みた。

(1) 中里七ツ舞の体験を重視した第1次伝統継承型実践

伝統継承型の最初の実践は、2004年12月から1月にかけての3回、武田会長に直接指導を依頼し、「保育内容（音楽）」の授業の履修者を対象に実施したものである。履修学生は音楽科の3名以外は全て教育学部の他科の学生であり、これに農・工・人文社会・教育の全4学部が活動する岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」のメンバー数名が有志として参加した。

武田は、見た目に派手な「横跳ね」よりも、習得するのは大変であるが、中里七ツ舞で最も大切にしている精神性の高い「道具取り舞」の指導を希望した。この「保育内容（音楽）」の授業における第1次伝統継承型実践は、科目の性格上、完璧に踊れることよりも本物の民俗芸能体験を重視すること、今回の体験を通して自分の地域の民俗芸能に対する関心を広げること、初めて触れる民俗芸能の学習体験によって幼児が初めての体験する時の気持を理解すること、などをねらいとしたものである。

第一次伝統継承型実践は、中里七ツ舞の由来と

特徴および実物による中里七ツ舞の道具の説明、道具を持たない「道具取り舞」の練習で全3回が終了した。結果的には、初めて踊る学生にとって「道具取り舞」は難しかったようであるが、授業後のアンケートでは17名中16名が民俗芸能への関心が高まったと回答しており、また学生の感想からは中里七ツ舞を体験した新鮮な感動が読み取れる。しかし体験中心の実践では、この舞に対する中里の人々の心を伝えるには限界があった。したがって2005年には中里七ツ舞に魅せられた「ばっけ」の有志を対象に、大学内伝承の可能性を求めて伝統継承型第2次実践を計画した。

(2) 中里七ツ舞の岩手大学への継承をめざした第2次伝統継承型実践

約60名の部員が所属している岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」は、これまで三本柳さんさ踊り、大森御神楽、沢目獅子踊り、ソーラン節、おてもやん、寺崎はね子踊りの6種類の芸能を継承している。4学部の学生が混在している「ばっけ」の有志を核とする第2次伝統継承型実践では、同時間に練習することが難しいため、時間差をおいて参加できるように、昼休みを挟んだ前後30分という自由参加の変則的な時間枠を設定した。音楽科の学生・院生の有志も練習に参加して、お囃子やビデオ撮影に協力した。

第二次伝統継承型実践では、平成17年度の5月から7月までの3ヶ月の間に武田会長から8回の指導を得た。

全8回の練習内容は、次の通りである。

- ①第1回目（5月10日）
中里七ツ舞の由来と特徴および実物による道具の説明
- ②第2回目（5月27日）
練習用の約40センチメートルの棒を使った「道具取り舞」の練習
（*会長に依頼していた岩手大学用の中里七ツ舞の道具を受け取った。）
- ③第3回目（6月3日）
各道具の回転のさせ方、ちらしのステップ、

「鳥居がかり」の練習

- ④第4回目（6月10日）
「鳥居がかり」、「全体3足」、「横跳ね」の練習
- ⑤第5回目（6月17日）
「横跳ね」と「組ちらし」の練習
（*筆者が太鼓のリズム譜を作成した。）
- ⑥第6回目（7月1日）
「横跳ね」と「組ちらし」の練習、全体の通し練習
- ⑦第7回目（7月8日）
「鳥居がかり」、「組ちらし」の練習と全体の通し練習、役割毎の道具さばきの練習
（*「ばっけ」の太鼓奏者が決定したため、ここからは鳥崎と一緒に太鼓演奏を行った。）

- ⑧第8回目（7月15日）
通し練習、衣装の着付け、お面の付け方、烏帽子や手っ甲の話など

この第2次実践の第1回目の練習時には、第1次実践に参加した「ばっけ」の有志の指導で、既に「道具取り舞」は練習済みであった。第2次実践では、常に交替で7・8名の「ばっけ」の有志が参加して、この時間以外にもサークルの練習日に自習練習を重ねていた。そして最終的には、中里七ツ舞の踊り手9名とお囃子（太鼓2名、鉦1名、笛2名）の5名の14名による中里七ツ舞グループが結成された。この中里七ツ舞グループは、2005年9月22日から25日の4日間、14名全員が自ら希望して、中里地区の中里交流会館にて合宿を行い、踊りやお囃子の練習に励んだ。本実践における武田と学生たちの努力の成果は、2005年10月22日の学園祭や11月6日の「ばっけ」の定期公演における中里七ツ舞の公演という形で結実した。すなわち初めて地元の保存会以外のメンバーによって中里七ツ舞の公開公演が実現したのである。

(3) 中里七ツ舞の伝統継承型実践の難しさと成果

- ①全体の構成と唱歌のない太鼓の把握
中里七ツ舞を学ぶ上で最も困難な課題が、太鼓の伝承であった。舞い手である武田に太鼓の指導

や説明を求めることはできなかった、また中里七ツ舞の中心的な太鼓奏者は中・高校生であり、遠方の岩手大学に呼ぶのは不可能であった。加えて中里七ツ舞には太鼓の唱歌がなく、唱歌による通常の伝統的な手法での学習は成立しなかった。そのため太鼓のリズムや全体の構成および太鼓と踊りのすり合わせは困難を極めたが、以下の手順によって太鼓のリズムおよび全体の構成を把握することができた。

ア) 平成15年のビデオ撮影時に小学生だった穂高淳(現在中1)の太鼓演奏を手がかりにする。

イ) 穂高淳に太鼓のリズムを自分で考えているリズム言葉(創作唱歌)で自由に表してもらおう。

ウ) 中野七頭舞の元会長山本恒喜が作成した中里七ツ舞の唱歌を頼りに全体構成を把握する。
(*なおこの唱歌は、武田会長以下、中里七ツ舞の保存会の人々には解読できない。)

エ) 武田の踊りの唱歌(一部分のみ)と穂高淳の創作唱歌を基に、筆者が中里七ツ舞らしい唱歌を創る。

この結果、イ)の穂高の創作唱歌から「ダントカ」「タッタカタ」という西洋音楽の唱歌と共に、中里七ツ舞らしい唱歌が把握できた。これと太鼓演奏のビデオ、ウ)の山本の唱歌の三者を突き合わせるにより太鼓譜を作成し、踊りと合わせながら修正を加えた。最終的には合宿時に穂高の指導を受けて太鼓の唱歌と演奏の完成をみた。

直接指導を受けることが難しい今回の場合は、芸能の伝承で問題視される楽譜が有効であった。また楽譜化により今後は太鼓リズムの消滅が避けられると思われる。すでに筆者は全曲の採譜を終えているが、本稿では中里七ツ舞で最も重視されている「道具取り舞」の太鼓譜のみを(譜例1, 47頁)に提示する。

②本物の衣装や道具の調達と学生の意識

本格的な伝統の継承を志す場合、衣装、それぞれの役割の道具、おかめやひょっとこの面、中里七ツ舞用の太鼓、鉦など、全て本物を入手する必要がある。幸いにも道具や面や楽器は、地元の人々の協力を得て本物を揃えることができた。しかし

舞うと美しく裾が揺れる中里七ツ舞の袴以外の烏帽子や衣装は、学生自身が慣れない手つきで、一針一針合宿で保存会のメンバーから教わったとおりに作り上げた。学生たちが自分の衣装を自分で作るプロセスは、彼らの舞に対する情熱が強化されていくプロセスであり、また伝統の重さを認識させられるプロセスでもあった。

③非合理的な型の学び体験の良さ

夏期講習会を開くほど指導法が確立している中野七頭舞とは違って、初めて外部で指導する武田は、経験的に体に染みこんでいる中里七ツ舞の分析的な説明や太鼓と舞の合わせ方の説明は当然不慣れであった。その結果、合理的な学びというよりも、ゆるやかに時間が流れる練習過程となった。時折、練習中に混乱を来すこともあったが、会長、学生、筆者の三者で話し合いながら練習するプロセスは、中断した芸能を復活させた人々と近似の追体験ができたと思われる。時間をかけて模倣する学び体験自体が、民俗芸能の本来の学びの有り様といえよう。まさに「型の習得の過程は、まねることから入って、盗む認識力が育っていくプロセス」⁸⁾であり、「わざの習得において厳密な意味での順序性や段階性はない」⁹⁾ということを実感させられた。

以上の第2次伝承継承型実践で、中里七ツ舞は心からこの七ツ舞が好きな「ばっけ」の学生に継承された。(資料1)のアンケート結果によると、今後、「ばっけ」内伝承も期待できそうである。

3. 大学の授業における中里七ツ舞の素材発展型による音楽づくりの試み

(1) 素材発展型の意味

素材発展型は、その芸能を特徴づけている要素(リズム、メロディー、楽器、舞いなど)を基に音楽を創る創造的な学びである。これについては、正当な伝統の追求だけに価値を求める立場からは認めにくいであろう。しかし時間的・予算的な制約のある学校教育においては、必ずしも本来の伝統継承型の学びではなく、一時的な体験学習で終

わる場合が少なくない。もっとも、一時的な体験学習にもそれなりの成果は期待できる。しかし、短時間の取り組みしかできない制約の中で地域の民俗芸能への憧れを喚起したいと願う時、また子どもの創造性を開くという教育的・音楽的なねらいの達成を志す時、短時間でも表現可能な素材発展型のアプローチに価値を認めることができる。

この素材発展型における発展とは、芸能そのものの発展を意味するものではなく、あくまでもそこに使われているリズムやメロディーなどの素材を発展させて新しい表現を創り出すことに価値をおくものである。自由な発想による即興的な表現や多様な創作活動は、平成元年の第6次学習指導要領に導入されて以来、次第に実践されるようになってきている。音楽づくりは、子どもが主役の学びによる「確かな学力」の育成との関連でも強調されている分野でもある¹⁰⁾。

次項では、素材発展型の取り組みとして、岩手大学と宮城教育大学の実践を例示する。

(2) 岩手大学と宮城教育大学における素材発展型の実践とその成果

筆者の「合奏」の授業では、通常、学生が2単位時間(180分)を使って、経験創作で自由に2ないし3部構成でオリジナルの太鼓音楽づくりを行う。平成17年度は、中里七ツ舞による素材発展型の実践を試みた。民俗芸能による素材発展型に

は、さまざまなタイプの学習活動が考えられる。

例えば、代替楽器を使って可能な範囲で本物のお囃子に近づける活動、太鼓のリズムに自由に旋律やリズムを重ねる活動、特徴的なリズムをテーマにした Rond 形式の音楽づくり、特徴的なリズムを生かした自由な音楽づくりなど、多様な活動を展開することが可能である。

中里七ツ舞による素材発展型の実践では、(譜例2)に示す「道具取り舞」で特徴的なアと「ちらし」で特徴的なイの二つのリズムを3部構成(I-Ⅱ-Ⅲ)に含む太鼓音楽づくりの活動を行った。

岩手大学における太鼓音楽づくりでは、中里七ツ舞の二つリズムは、(資料2)の(1)のように表現された。特にBグループのサンバと中里七ツ舞のリズムを重ねる試みには意表をつかれた。

受講生の半数が音楽科以外の学生による宮城教育大学での集中講義(17年度)における同様の活動では、自由な太鼓音楽づくりの中でアとイのリズムは、(資料2)の(2)のように表現された。

紙幅の関係で授業後の学生のアンケート結果を掲載することはできないが、中里七ツ舞の生きたリズムを使ったことで、本物の中里七ツ舞への興味・関心の高揚、自由な表現の中に本物とつながる要素があることへの自信、どんな素材でもアイデアで表現を広げていけるという音楽表現活動の広がりの認識、音楽づくりの活動そのものへの関心等を読み取ることができる。

(譜例2)

「道具取り舞」のリズム

ア

ダン ツット ダン ツット ダン ダン ツット ダン ダン ツット ダン ダンド ダン ツット ダン

「ちらし」のリズム

イ

ダン ツコ ツコ ツコ ダン ツコ ダンド ド ダン ツコ ツコ ツコ ダン ツコ ダンド ド

中里七ツ舞による素材発展型の太鼓音楽づくりでは、本物のリズムやメロディーを全く違う形で再生させる創造的な活動によって、創造的な表現力を高めると同時に、本物の芸能への興味関心を喚起するという教育的な意味を発見することができた。

おわりに～学校教育における民俗芸能の取り上げ方に触れて

研究対象の中里七ツ舞に関して、大学における2種類の実践的研究について述べた。最後に本実践を振り返りながら、小・中学校で民俗芸能の取り上げる際に考慮すべきことについて触れておきたい。

①民俗芸能に取り組む意味と教師の役割

本実践では学生自身が本気にならなければ中里七ツ舞を継承することはできなかった。子供の場合でも、学ぶ意味と対象の価値を自ら納得できた時に、初めて本当の学びが成立する。したがって民俗芸能を伝承する良さを自明の理とせず、子どもと共に芸能に取り組む意味や価値を考え、取り組みへの意欲を慎重に引き出すことが大切である。芸能と学び手の橋渡しとして教育的に重要な部分を担えるのは、保存会ではなく教師なのである。

②伝承への影響の自覚

学校が地域の民俗芸能を取り上げる場合には、学校がその芸能の伝承システムに何らかの影響を及ぼすという自覚と覚悟が不可欠である。すなわち地域や保存会は学校内伝承を期待するであろうし、学校はその期待を受けとめざるを得なくなる可能性があるということである。明確なねらいや将来的な見通しをもたずに安易な気持ちで学校に導入することは避けなければならない。

③学校内伝承の可能性の探求

本研究における第1次伝統継承型実践で明らかのように、伝統継承型による一時的な体験であっても、それなりの教育的効果を求めることができる。しかし地域の民俗芸能を大切に育み、宝のように尊重している伝承者の心を伝えるためには、

できれば学校内伝承の可能性を追求することがのぞましいと思われる。

④素材発展型の学びに発見できる良さ

素材発展型の学びは、それ自体が伝承にかかわることはない。時間的な制約や学校で一部の地域の芸能を取り上げるのが難しい場合など、素材発展型の学びが生きてくる。柔軟かつ創造的な学びによって、対象芸能への興味や関心を喚起し、その後は個々の子どもの自由な意思に委ねてはどうだろうか。地域の民俗芸能に魅せられた子どもは、自ら進んで保存会の門をたたき可能性もあるであろう。

学校教育において民俗芸能を取り上げる際には、その目的や校内伝承の可能性などによって、それぞれの学校の実態や実践のねらいに適した学びの方法を吟味する必要がある。伝統継承型と素材発展型の二つの性格の違う学びには、それぞれの良さはもとより、両方で補完し合える良さもあることを付言しておきたい。

中里地区は少子化が進み、地域での伝承が今後どのように変化していくのかが予測できない状況である。本研究によって、岩手県の美しい中里七ツ舞が、地元の岩手大学で生き続ける可能性が生まれたことは何よりも大きな成果である。今後、末永く大学内伝承が続くことを祈念している。

(譜例1) 太鼓譜

中里セツ舞 「道具取り舞」

島崎篤子採譜

第一行: $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$ $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$ $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$ $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$ $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$
 第二行: $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$ $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$ $\text{ダ' ダンツダ' ダンツダ' ダンツ}$ ダンツットダンツット ダント'ダント'ダント'ダント'
 第三行: ダント'ダント'ダント'ダント' ダンツット - ダン ダンツットダ' ダン ダンツットダ' ダン ダンツットダ' ダン
 第四行: ダンツットダ' ダント' ダンツットダ' ダント' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダン ダンツットダ' ダント'
 第五行: ダンツットダ' ダント' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダン ダンツットダ' ダント' ダンツットダ' ダント'
 第六行: ダンツットダ' ダント' ダンツットダ' ダント' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツット - ダンツット ダ' ダンツットダ' ダン ダ' ダンツットダ' ダン
 第七行: ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット
 第八行: ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット
 第九行: ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット
 第十行: ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット ダ' ダンツットダ' ダンツット

(資料1)

伝統継承型第2次実践アンケートのまとめ

- ・対象：岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の中里グループ ・実施日：2005年10月20日
 ・アンケート項目（次のA～E）

- A：何故、「中里七ツ舞」を踊ろう（お囃子をしよう）と思いましたか。
 B：「中里七ツ舞」にはどんな魅力があると思いますか。
 C：中里地区での合宿で何を学び・何を感じ取りましたか。
 D：「中里七ツ舞」の伝承に関して、今後どのように「ばっけ」がかかわるべきだと思いますか。
 E：あなたは今、どんな気持ちで「中里七ツ舞」にかかわっていますか。

| | | |
|-------|-----------------------|---|
| 先打ち | A B C D E | 1年の頃に講義に出席し、その後、毎回講義に参加して楽しくなり踊っていて今に至る。一人ひとりの個性が出せる。メリハリのつくところとしなやかに踊るところが区分されていて美しい流れになっている。中里の自然を表しているようだ。 中里地区の豊かな自然と地区の方々のつながりの温かさ。 サークルとしては1演目として大切に踊りついでいきたいと思う。 踊るのはとても楽しいが、先打ちという大事な役割に自分の踊りがついていけないのではないかと不安になる。 |
| 谷地払い1 | A B C D E | 1年生の時に中野七頭舞を見たのがきっかけだが、中里七ツ舞のビデオを見てカッコいいと思った。とにかく踊りたいから！ とても衣装が映えるし、踊っていて楽しいこと。 自分たちの不安に思っていた箇所正しい踊り方。中里地区の自然。 毎年保存会に行つて、とにかく「ばっけ」で踊り続けていく。 1年生への引継ぎなどどうなっていくかが不安。今は楽しくてしょうがない！！ |
| 谷地払い2 | A B C D E | 講義に行った友人に魅力を語られて踊ろうと思った。 どの道具も遜色なく踊れるし躍動感がある。隊形が変化する面白さや礼儀正しい終わり方。地元で息づいている民俗芸能の力強さを感じた。地域社会の人の輪というコミュニケーションがあるからこそ生まれる強さだと思う。 保存会の方と連絡を取り合つて、「ばっけ」の後輩にきちんと伝えていければ良いと思う。 今年初めてばっけで取り組んだ踊りなので、発表が楽しみだ。 |
| 薙刀 | A B C D E | 以前から中野七頭舞に興味があったが、ビデオを見て中里七ツ舞の柔軟な踊りに惹かれた。 中里地区の雰囲気を感じ、引き込まれる何かがあると思った。山の中の小さな集落でこのような踊りが育まれてきたのは素晴らしいことだと思う。 中里地区の人たちの七ツ舞に込める想いの強さを感じた。子供が減っていく中で、「ばっけ」で七ツ舞を踊る重大さを感じた。 踊りとしてだけではなく、中里地区の伝統文化と地元の人たちと暮らしや自然も伝えていきたい。 「ばっけ」で薙刀は私一人なので、今年は「見せる」より「魅せる」踊りをしていきたい。 |
| 太刀 | A B C D E | 最初から講義を受けていた人たちに魅力を語られ、心をひかれた。 それぞれの道具に特徴があり、それを生かして踊ること。 地区ごとの七ツ舞の特色を守つていこうとする気概。 保存会とできるだけ連絡を取り、迷惑でなければ合宿させてもらう。 その土地で伝承されるのが伝統芸能なので、保存会と密接につながり、別のものとして「ばっけ」内で伝えていければいい。真の伝承は「ばっけ」内では行えないのではないかな？ |
| 杵 | A B C D E | 中野七頭舞とは違う素敵な動きに魅力を感じた。一種の一目惚れに近い。 全体の美しさや個々の魅力というか個性が輝いていて、見ていて飽きない。 地区内の結束の強さ、踊りに対する熱意とプライドといった形ではないものを感じ取つた。 保存会と交流をもちつつ、踊り手を増やし、多くの場で踊つて中里七ツ舞を知ってもらう。 大学では杵を踊れるのは私しかないというプライドと責任を感じる。誰が抜けても中里七ツ舞は成り立たない。全体で一つだという意識をもっている。 |

| | | |
|------|-----------------------|---|
| 扇子 | A B C D E | 北上の「みちのく芸能祭り」で七頭舞を見てファンになり、今回はが非でも踊りたかった。独特な足さばきや聴き取るのが難しいほどの軽快なお囃子など、踊りつがれてきた感動。地元の人々の人柄の良さ、温かさ。この町の伝統を伝承していきたいと思った。「ばっけ」が中里の人々にお世話になったことを忘れずに、しっかり伝える思いを一人一人もつべきだ。とても楽しい。ありがたい気持ちで一杯です。 |
| おかめ | A B C D E | もともと中野七頭舞が大好きで踊りたかったところ、授業での練習の話があった。軽快なお囃子と躍動感のある踊り。ビデオを見ているだけではわからないことが多い。やはり本物を見ることは大切だ。とりあえず私が「ばっけ」にいる間は、無くさせない。踊れることが幸せ！ |
| ひょっこ | A B C D E | 講義に出たりビデオを見たりして踊りの魅力に取り付かれ、本気でやってみたいと思った。道具が違い、それぞれの踊りに特徴がある。見て泣きそうになった踊りは中里七ツ舞が初めてだ。踊りの細かい部分を学べた、精神的には七ツ舞を踊る子供の時分の道具への誇りと愛情。地域の人々の七ツ舞への熱い思い。よそ者の私達に本気で踊りを教えてくれた心の温かさ。よそ者が伝承はできないが、「ばっけ」としてひたすら踊り続けていく。保存会にも毎年行って、もっと七ツ舞を踊っていくべきで、これは当たり前なこと。私は11月に引退だが、中里七ツ舞一期生として踊りきりたい。ただ素直に好きだから踊る。 |
| 太鼓1 | A B C D E | 1年の時に見た中野七頭舞のリズムに惹かれたが、中里の話があり中野とは違う趣に惚れた。今までサークルになかった軽快な調子や華やかさに魅力を感じる。実際の太鼓打ちの方に教えていただき、大きなものを得られた。人々の温かさを感じた。責任をもって「ばっけ」内で伝承し、今後も保存会の方に監督していただきたい。今まで口唱歌と実際に打って教えてもらったので、楽譜から太鼓を学ぶのは、少し戸惑いがあったが、先生の楽譜は大きな助けになった。今年で引退なので、後輩が中里に関わって行きやすい環境づくりしたい。後輩に恥じない太鼓を打って手本になれたらと考えている。 |
| 太鼓2 | A B C D E | お囃子を演奏したいと思った時に、丁度、中里が入ってきた。また一人では大変な太鼓だから。今までの「ばっけ」には無い、軽快さ。本物の太鼓を学んだ。保存会の方々の情熱と優しさ。「ばっけ」としては続けていきたい。自分が学んだことは後輩に伝えていきたい。太鼓をたたいている時はすごく楽しい。関わる事が出来て良かったと思っている。 |
| 鉦 | A B C D E | 中里七ツ舞の華やかさが大好きで、このお囃子が大好きだから。華やかさや踊りの衣装や派手さ。地元の人々の温かさや自然の豊かさ。子供たちのキラのある元気な踊り。中里地区の人々との交流を絶やさずに、保存会にできるだけ近い形で伝承していく。楽しくて踊りを見ながら笑顔で鉦を鳴らしている。 |
| 篠笛1 | A B C D E | お祭りのようなお囃子で、心も体も動き出すような楽しさがあるので吹いてみたかった。激しさと静けさ、凜とした雰囲気。それぞれの道具の特徴が表れているところ。鳥居がかりから全体三足につながるところが鳥肌が立つほど好きだ。奥深い森や山を切り開いて生きる力が中里地区にはあった。七ツ舞はそれが凝縮したもの。中里の笛の音を追求し興味をもつ人には一緒に学び、輪を広げていきたい。中里七ツ舞に感じる生命力の一つになりたい。 |
| 篠笛2 | A B C D E | 「ばっけ」に取り入れやすい条件がそろっていた。列や輪など踊りの隊形が変わっていくところ。保存会の人々の想い。「ばっけ」としては、「ばっけ」の一演目としてかかわっていく。何とか七ツ舞の笛を形にしたい。保存会の方々へのお礼の気持ちを込めて吹いている。 |

(資料2)

大学における素材発展型の例

(1) 岩手大学における素材発展型の例

*三部構成 (I~III) ア=「道具取り舞」のリズム イ=「ちらし」のリズム

| | |
|---|---|
| Aグループ：7名 曲名「琉球太鼓」(IIの部分が沖縄風) | |
| ア | Iの部分で締太鼓が杵打ちを使ってアを表現し、大太鼓が1拍目に打ち込み、リズムを明確にする。鈴、テンブルブロック、ウチワ太鼓、縦笛が創ったリズムや旋律を重ねる。 |
| イ | IIIの部分に大太鼓が杵打ちを使ってイを表現する。他の楽器はI同様に即興で重ねる。 |
| Bグループ：8名 曲名「太鼓サンバレレ」(IIの部分がサンバのリズム+イのリズム) | |
| ア | Iの部分で締太鼓がアを表現し、これに大太鼓、当たり鉦、鈴、木琴、縦笛が加わる。またIIからIIIへのつながりも締太鼓でアのリズム。そのまま楽器が加わりIIIの部分に入る。 |
| イ | IIに入るつながりの部分から締太鼓が早いテンポでイを鳴らし、これにマラカス、アゴゴ、縦笛、フロアタム、木琴が加わり、サンバを演奏する。 |

(2) 宮城教育大学における素材発展型の例

| | |
|--|--|
| Aグループ：6名 曲名「志村太鼓」(日本+ラテン風でアとイを旋律楽器が担当) | |
| ア | Iの部分は、締太鼓、ボンゴ、鈴の順に入り、鍵盤ハーモニカと縦笛が交互に日本風の旋律を奏で、それにピアノが重なる。途中から縦笛がC-D-Aの音で、続いて鍵盤ハーモニカがA-C-Gの音でアを表現する。 |
| イ | IIの冒頭から木琴が鋭く速くA音のみでイを打ち続け、これに他の楽器が加わる。 |
| Bグループ：7名 曲名「無太鼓」(全体的に音色の効果を追求) | |
| ア | ゴングとティンパニーでIIにつないだ後、すぐに2台の締太鼓がアを表現し、鉄琴と縦笛が旋律を重ね、トライアングルとタンブリンがリズムを刻む。 |
| イ | IIIの部分でティンパニーのリズムに重ねて締太鼓が速いテンポでイを表現し、他の楽器も速いテンポで加わり、最後のゴングの音が鳴るまでエネルギッシュに演奏する。 |
| Cグループ：6名 曲名「熊太鼓」(熊祭りのようなダンス入り) | |
| ア | Iの部分で締太鼓がアを表現し、ウッドブロック、コンガ、木琴、縦笛の順に加わる。IIIの部分でも締太鼓がIと同じように表現する。 |
| イ | IIの部分で締太鼓とバスドラムのセットと木琴が驚くほど速いテンポでイを表現し、笛、ウッドブロック、タンブリン、鈴の4人は楽器を鳴らして踊りながら周囲を回る。 |

【註および参考文献】

- 1) 北上・みちのく芸能祭り実行委員会『炎の伝承』（1999年，117-118頁）参照。
- 2) 岩泉町教育委員会『岩泉地方史』1980年，533頁参照。
なおこの書によると，七ツ舞の踊りの順序は，天孫降臨の際の道案内または神武天皇の東征の途に上る際の行路障害破棄と道案内をかたどったものとも伝えられている。
同書534頁参照。
- 3) 中里七ツ舞の由来等については，保存会会長の武田由起子に伺ったものである。
- 4) 筆者が入手した中里七ツ舞の保存会名簿は，武田の手書きの名簿である。
- 5) 小本小学校では，複数の芸能を平等に扱うために，練習時間の配分に気を配っている。
- 6) 小本小学校「第27回七頭舞発表会」のプログラム中の中里七ツ舞の紹介文参照。
- 7) 現在では美しい扇を使っているが，昔は無地の扇子しか使えなかったため扇子の呼称が残っている。
- 8) 齊藤孝『子どもに伝えたいく三つの力』日本放送出版協会，2001年，116頁。
- 9) 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会，1987年，162頁。
- 10) 音楽づくりと「確かな学力」との関係については，高須一連載（『ONKAN』音楽鑑賞教育振興会2005年10月号6-9頁）に詳しい。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会科学研究補助金（基盤研究C）「岩手県の民俗芸能と学校教育～中野七頭舞と剣舞を中心として～」（課題番号：15530561）の助成による研究成果の一部である。